



大阪府立北野高等学校図書館
第3号
2012. 7. 7発行

「1年間で何冊くらい本を読みますか？」と訊かれたら、何冊くらいだと答えますか？私に関しては、ふだんなかなか本を読む時間がないのですが、夏休みや冬休みといったときに1, 2冊ほど読んでいます。みなさんも、今年の夏休みには、ゆったりとした気持ちで本を読んでみてはいかがでしょうか？ いくつか紹介しておくので、参考にしてください。

夏休みに向けての図書の長期貸し出しを7月13日(金)から7月31日(火)までの図書館開館日に実施します。返却日は8月22日(水)です。10冊まで借りられます。

7月26日(木)～7月31日(火)の開館時間は午前10時～午後3時です。

● 三田誠広「いちご同盟」【913/M48/2】

同年代の自殺する少年のことを考えるなど、厭世観漂う中学三年生の良一が、野球部の徹也を通して、入院中の直美と知り合います。その直美のひたむきさに良一は人生に前向きになっていくという話です。映画化もされたくらい、とてもいい話です。最後まで読めば、題名の“いちご”の意味も分かります。少し書いただけではこの本の良さを伝えることができませんが、是非、読んでもらいたい一冊です。特に、今のあなた達の年代の人にはお奨めです。

他にも、三田誠広の本で「高校時代」や「僕って何」〈913/M48/1〉などもお奨めです。

● 三浦綾子「塩狩峠」【913/M38/4】

結納に向かう途中、乗っていた列車が暴走し、それを止めるために自らレールに飛び込んでブレーキとなり、大勢の乗客の命を救った人の実話をもとに書かれた物語です。三浦綾子はキリスト教徒で、その精神を感じる作品が多数あります。

● **ダニエル・キイス「アルジャーノンに花束を」【933/K14/1】**

精神遅滞者であるチャーリーは、開発されたばかりの脳手術を受ける人間での第1号となります。先に動物実験で手術を受けていたハツカネズミのアルジャーノンは、すごい記憶力と思考力を実験で発揮していて、チャーリーにもその期待がよせられます。そして、実際チャーリーも天才的な頭脳になっていくのですが、やがて、もとの精神遅滞者に戻っていくというストーリーです。これだけを読めば、何だか恐ろしい話のように思うかもしれませんが、全くそのような話ではありません。私には、この話はとても悲しい話でした。読み終えた後、何ともいえない思いになったのを覚えています。チャーリーが最後に教授に宛てた手紙の一部に題名のフレーズが書かれています。

● **井上靖「あすなろ物語」【913/I5/28】**

田舎の小さな村で、祖母と暮らしていた少年が、さまざまな出来事を経験して成長していく姿を描いた青春小説です。明日は檜になろうと願いながら、永遠に檜にはなれないあすなろ（明日なろう）と自らを重ねながら、たくさんの人との出会いの中で自らの生き方を見出していく話です。特に山場があるというわけではないのですが、つい夢中になってしまう1冊です。

● **吉田洋一「零の発見 ―数学の生い立ち―」【410/Y3/1】**

岩波新書から出版されている本です。インドでの零の発見が、人類文化史に大きな影響を与え、エジプト、ローマ、ギリシャなどにおける数を書きあらわすための工夫やそろばん、計算尺などの意義にもふれながら、計算法が発達してきた歴史を読みやすく紹介しています。

● ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」

【983／D1／4－1, 2, 3, 4, 5】

父親殺しをめぐる4人の息子たちの葛藤を描いた話です。ドストエフスキー最後の小説で、思想上、宗教上のテーマを集大成した最高傑作といわれています。物語は、1860年代のロシアのある田舎町での出来事。あちこちに居酒屋を経営し、金貸しをして成り上がったカラマーゾフ家の当主であるフョードルが殺害されます。犯人は、彼の4人息子の誰かだと思われる。長男のドミトリイは、退役軍人で放蕩無頼の激情家だが、実は高潔な一面をもつ。次男のイワンは、理科大を卒業した聡明な青年で、神を信じていて、「人間は何をやっても許される」と信じている。三男のアリョーシャは、修道士の見習いで、神を信じ奇蹟を信じる純粋な青年。四男のスメルジャコフは、フョードルが精神を病んだどこかの女性に産ませた子で、癲癇の持病があり、カラマーゾフ家の料理人として働いています。

物語の途中で、イワンが自作の劇作「大審問官」をアリョーシャに語るシーンがあるのですが、この劇作自身とても興味深いものがあり、劇作中にでてくる、沈黙を守るキリストの姿勢は何を意味しているかは、今でも大きな論争になっているそうです。

● 立原正秋「冬の旅」【913／T56／2】

昭和43年から翌年にかけて読売新聞に連載された作品です。

義兄を2度刃物で刺し、2度も刑務所に入ることになる少年の話です。1度目は、義兄が母を犯そうとしたところを、2度目は、義兄が実の父を殺そうとしたところを阻止しようとして。読んでいて少し違和感を覚えるところがあるのですが、一気に読み終えてしまうほど、どんどん読んでしまう本です。

● 上温湯隆「サハラに死すー上温湯隆の一生ー」

今から30年ほど前に、20歳前後の青年がサハラ横断の旅をしたときの手記です。1度目の試みは「サハラに賭けた青春」という本に記されており、この本は2度目の旅のときの日記をまとめたものです。結局彼は、現在のマリ共和国中北部の主要都市ガオの北部あたりで、志半ばで倒れてしまいます。後の調査で死因は渴死だったそうです。高校を中退してまで挑んだ、この無謀とも思える旅（冒険）が、正しかったのかどうかは私には分かりません。豊かになりすぎた今の時代、すべてのことがあたりまえだと思っている人には、彼の行動は、滑稽に思えるかもしれません。最後に、旅先で彼が友人に宛てた手紙を紹介しておきます。

若いときに力をつけなければ、いつ力をつける時期があるのか。

僕は短い時間に、遊ぶ飲むは十分に体験した。

君が遊ぶ時間がないというのは、無益なときを過ごしているからだ。時間は有効に使うべきで浪費するものではない。

俺自身へのことばでもあるが、

今は雪の下の子のように、耐えて力を蓄え、その実力がついた春にいっせいに芽を吹き、夏は、太陽をいっぱい受けて精いっぱい活動しようではないか。

旅をされていてつくづく思う。

人生とはなんと短いことか。

楽しんで過ごして、生きているといえるだろうか。短い人生だからこそ、最大限に燃焼させるべきだと俺は思う。

今、俺はサハラで、精いっぱいサハラを研究している。君にもなにかがあるはずだ。

今からでも遅くはない。俺たちは若いし、まだまだ時間があるじゃないか。